

俺が殺人鬼の生まれ変わりってマ？

輪廻の主

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

偉人、英雄、殺人鬼——廻る廻る。輪廻の渦は廻り、廻り、そして再誕する。

この世界には過去の偉人や英雄の生まれ変わり、もしくはその末裔が存在する。その者達は、その偉人や英雄が持っていた才能を受け継ぎ現代に誕生する。時には才能だけではなく、かの偉人や英雄にまつわる逸話、伝説に基づく特別な能力すら行使出来る。

本来ならばあり得ぬ交わりだ。だが、面白い。我々が観測出来ぬ高次元の存在——所謂、神はそう思つた。

ホンの気紛れなのかも知れない。しかしこれは——彼の物語では無い。『彼』らの物語だ。

目 次

朝の日常

1

その日——二度目の生を受けた
始業式とか怠くてしようがない

4 13 4

廻り者

22

学校が半日で終わつたら嬉しくね?

29

引っ越した後は回りの物を揃えるのが大変なんです
雑な戦闘回のようです?

39

「帰宅部にとつては放課後なんて家までのRTAでしかない」

—

58 47 29

13

4

朝の日常

霧が深く立ち込める都。そこは英國の中心地、ロンドン。華やかな街並みを想像するかもしれない。しかし、このロンドンには、恐ろしい殺人鬼が“居た”。

女性の悲鳴が夜の街に響き渡る。

嗚呼、またこの夢か。俺はここ十年近く、頻繁に見るこの夢に飽々していた。狭い路地裏に広がる血溜まりに佇む人影。人影が男なのか女なのかは分からぬ。大人のようにも見えるし、子供のようにも見える。影は揺らめいて、やがて消える。そしてまた女性の悲鳴が聞こえる。これの繰り返しだ。

忌まわしきあの日の夜、俺は、一度死んだんだ——。

——ピ。ピ。ピッ、
ピ。ピ。ピッ、
ピッ——

ああ、朝か。あの夢を見た日の朝は、気分が最悪だ。逆に身体は絶好調なのだが。鳴り止んだ目覚まし時計を見てみると、朝の7時。こ

これから準備して学校へ行く。余裕じゃないか。

「だから二度寝しても問題無いって訳だ」

「駄目。起きる」

「……………オーフィスさん？ いつからそこに？」

「30分くらい前。朱鳥を起こしに」

「誰かに言われたのか？」

「ん、黒歌に。きっと朱鳥は起きないだろうって。我、頼まれた」
えつへんと胸を張る幼女。フリフリのゴスロリに身を包む黒髪の少女は、家の居候である。

さて、聰明な読者諸君ならもうお分かりだろう。ここが、この世界がどう言つた世界なのか。そして俺は、そんな世界に転生した、愚か者と言う訳だ。

「朱鳥、起きる。朝ごはん、もう出来てる」

起きてーと俺のパジャマを引っ張るオーフィスにニヤニヤしてしまう。いかんいかん。朝から邪な心を抱いてはいかんぞ。あの御禁制風紀委員長系ママに何を言われるか分かつたもんじやない。イエスロリーダ、ノータッチだ。うん。

「そうか。ありがとよ。二度寝は諦めるから、先に行つてくれ。準備していくからさ」

「ん、待つてる。だから早く来る」

そう言うとオーフィスは部屋を出ていく。

そう、これが朝の日課。今の生活が始まつてから続いている。
「さて、と」

堕落と怠惰の極致。N I ★ D O ★ N E ★は残念だが、もう目は覚めてしまった。名残惜しいが、ベッドから出ないとな。

あの夢は、俺が物心ついた時から見ている。そもそも、夢と言う物は、あの夢以外見たことが無い。

所詮、夢は夢でしか無い。そう思えたならどんなに楽だつたことか。

自室を出て洗面所へ行き、顔を洗い、歯を磨く。そうやつて準備が出来れば、次は台所だ。

「あ、やーつと起きてきたにやー。もう、遅いよ」

「うめんうめん。ちょっと夢見が悪くてね」

台所で朝食を準備していたのは黒歌だ。彼女も、家の居候…………と言ふ事になるのか？だが、彼女との付き合い（男女の関係では無く）はもう3年になる。居候では無く、もう家族と言つても良いのかも知れない。うん。

「何を一人で納得してゐるのか知らにやいけど、早く食べちゃつてね。
今日から新学期、朱鳥も二年生だにやー」

そう、今日から新学期。俺は高校二年生になつた。俺がこうして高校に通えているのが今でも不思議なのだが、これを当たり前と思わず。こんな素敵な日々を送れるようになつた人達に感謝しなければいけない。

「じゃ、食べるか。新学期早々、遅刻はしたくないしな」

「早々」

オーフィスは既に席に座つて俺達を催促している。俺も黒歌も微笑んで

「よしー！それじゃあ手を合わせてーーー」

これが、俺が愛すべき日常の1つである。

その日——一度目の生を受けた

才能が欲しかった。何か1つでも良いから世の中に誇れる才能が欲しかった。欲を言えば1つじや足りないけれど、それを使い出したらキリがない事も分かっていた。何かを始める勇気も無くて、何かを続ける根性も無くて、ただただ同じような毎日を過ごしていく。夢を目指していた事もあつたけれど、いつしかそれも諦めてしまった。

大学まで進んで、無事に卒業出来た事は覚えているんだけど

「……、どこよ」

気がつけば、辺り一面真っ白な砂漠のド真ん中。リゾートビーチを想像して貰えれば良いだろうか。あれが何処までも果てしなく続いている世界。

これが夢なのは間違いないだろう。でなければ、こんな非現実的な場所に居るはずがない。第一俺はついさつきまで——

「——あれ？俺、どこに居たんだっけ？」

ああ、まだだ。ここに来てから、どうも記憶が欠如しているようだ。

自分の名前も、過去の経歴だつて粗方思い出せる。だけど、ついさつきまでの出来事を忘れてしまった。

「マジかよ……」

俺はこの事に、言い知れぬ恐怖を抱いた。落ち着け。落ち着くんだ。大学の卒業祝いとして友達と旅行を計画していた事は覚えてる。

それで、どうせなら海外が良いと言う話もした。場所は…………えつと…………ヨーロッパだつた気が…………。いや、この際場所はどうでも良い。えーっと、それから色々と計画して、遅い時間になつたから解散したんだ。うん。それで家に帰ろうと……帰ろうと……。

「あれ？俺の家、どこだつけ？」

お、落ち着け!! 住所は、東京都○△区の…………あー!! 待て待て!! すぐには思い出すとも。いつたい何年住んできたと思つてはいるんだ。

「何年…………なんねん…………なん、ねん…………」

俺、何歳だつけ？ それと、俺の名前、なんだつけ？ え？ え？ 俺は誰で……俺、俺は……だれ？

「——ちつ、遅れたか」

ゴオオオオオオオオと音と共に、黒い影が俺を包み込んだ。黒い影はやがて実体を伴い、人形へと変わっていく。

「ふむ。落ち着け落ち着け。ほーれ深呼吸じや。怖がる事はない人の子よ。我が教えてやろう。思い出させてやろう。故に、この砂に飲み込まれるでないぞ」

俺をすっぽりと包み込んでくれているから、きっと俺より大きいんだろうな、と思つていたがそうじやなかつた。俺の下半身が丸々砂に沈んでいたのだ。

「ほれほれ。安心せい。大丈夫じや、大丈夫じやよ」

男の人のか女の人のかは分からぬが、その声を耳にするだけで安心出来た。背中を擦ってくれる手は優しく、暖かかつた。

「すみません。みつともない姿をお見せしました」

「ふはははは、構わん構わん。我は許す」

あの後、落ち着いた俺は目の前の人の腕の中で泣いた。もしかしたら発狂寸前だつたのかもしれない。目の前に居る人が何者なのか……それはこれから聞くことにしよう。

「うむ。さて、お主について説明せねばいかんな。先ず始めに、お主は最近の出来事を思い出せるか？何でも良い」

最近の出来事……

「すいません……何も思い出せないです」

「うーむ。成る程な。これは重症よな」

目の前に居る人は腕を組み、難しそうな顔をして唸る。空から見れば、この真っ白な砂漠にポツンと浮かぶ黒い点のように見えるだろう。それだけ目の前に居る人は黒で統一されていた。真っ黒なドレスに黒いストレートヘア。外見は若々しく20代前半に見える。だと言うのに、古くさい言葉遣い。まるで中世の貴族のようだ。ああ、全身が黒で統一されていたと言つたが、彼女……の肌は白く健康的な瑞々しさがある。

「いよいよーし！では1から説明するぞ！」

「はい。よろしくお願ひします」

いつたい何を言われるのか。この時点では、恐らく次に言われるであろう事が想像できていたのかもしれない。

「お主は死んだ」

バツサリと、真顔で言い切られた。

「……隨分と……遠慮無く言いますね」

「それはそうだろうが。お主は死んだ。これは覆らぬ。いや、覆しても良いのだが」

「出来るんですか!?」

「まあ待て。お主の死因だが、歩道を歩いていたお主に居眠り運転をしていたトラックが突っ込み、ビルの壁とサンドイッチ★になつた訳じや」

あー、成る程ー。サンドイッチ★か～～～つて！メチャクチャ軽い
な?!?!

「当然、死体は原型を止めておらず、もうハンバーグ状態じやよ。そんな死因をしたのに、あつさりと何事も無かつたかのように復活してみい。お主は化け物として見られることじやろうな」

あつ……………そ…う…か。俺が生きてたあの世界じや、魔法もなければSF映画に出てくるような近未来技術も無い。そんな中で、ハンバーグよろしくミンチになつた死体が元通りになつて、尚且つ何事も無かつ

たかのように動きだしたら……。

「うむうむ。理解したようじゃな。頭の回転は悪くない」

彼女は満足気に頷いて、何かを思い出したかのように手を叩いた。

「そうじやそうじや！我としたことが、久しぶりの客人故、すっかり忘れていたわ」

そう言つて指をパチンと鳴らすと、俺と彼女の間に丸いテーブルと椅子が二脚。机の上にはティーセットとお菓子が置かれていた。

「さあ、座るが良い。話の続きを茶を飲みながらするとしよう」

彼女は先に座り、カップヘティーカップの中身を注いでいた。その液体の色から察するにどうやら紅茶のようだ。

「む？ 紅茶は好かんか？」

「い、いえいえ。いただきます」

目の前で起きたファンタジーに面食らつたが、彼女の言うとおりならここは死後の世界。ならば、こう言うファンタジーもあり得るか。

「それで、俺は死んだと言う話でしたけど、なら俺はこれから天国か地獄へ行くんですか？」

そう言うと彼女はお菓子を摘まみながら渋い顔をする。何か変な事を言つてしまつたのだろうか？ あ、実は天国や地獄なんてものは無い、とか？

「いや、天国や地獄はあるよ。ただお主ら人間が想像しているような所では無いがな」

「と言うと？」

「ふむ……まあ良いか。天国や地獄と言うのはな、言わば保管庫のようなものじゃ。善良な魂を保管しているのが天国。逆に極悪な魂を保管しているのが地獄。そうやって基準を作つておるのじやよ」

「基準？」

「うむ。まあ、我にとつてはくだらぬものに過ぎん。我以外の管理者が勝手に作りよつた。実にくだらぬ。趣味の悪いことよ」

吐き捨てるように言うと、彼女は紅茶を一口飲んだ。

「お主が望むなら天国へとやつても構わん。だがあれはそんな優しいものではないぞ。虫籠……否、標本と言えば近いじやろう。自分のお気に入りを側に起きたいが故に作るのだから」

その“保管庫”についての詳細は聞かない事にした。決して気分が良くなるものでは無さそだからな……

「ふふつ。賢明じや。さてと、話に戻ろう。お主は死んだと言つたが、すまぬ。あれはこちら側のミスなのじや」

「えつ……？どういう……」

「うむ。お主ら人間が住む次元、そこに住む全生命には決められた天命……寿命の事じや。その決められた寿命までに、どのように生きたかで次なる生を決める。怠惰と堕落をし続けた者は、来世では険しい

人生が用意されていることじやろう。決して努力を怠らず、懸命に生きた者には、来世でささやかなる恩恵が与えられる」

恩恵……？ 胸の奥がざわついた。

「さつき言つた天国と地獄へ行つた魂は中々解放されん。故に、その魂には来世を用意することは難しいんじや。だがそれ以外の魂は、我らの審査により来世を決め、輪廻へと送る」

「…………それで、ミスと言うのは？」

彼女の顔に影がさす。心底申し訳なさそうにしながら続きを話してくれる。

「我の不注意でお主の事が書かれている書類が別の場所に紛れての、お主はあと六十年は安泰に過ごせるはずじやつたんじやが……部下の一人が勘違いしての。お主の死期を早めてしまふた。本当にすまんかった」

彼女はゆっくりと頭を下げた。

聞かされた内容に驚いた。怒りも沸いた。悲しくもなつた。この人……人？ を責めるのは簡単だ。どうして、と。何をやってるんだよつて。でもこれは……チャンスでは無いかと思えた。

「それで……これから俺はどうなるんです？」

彼女は俺の反応を知つていたかのように——いや、恐らくは思考を読んだのだろう。人間よりも上位の存在なはずだ。それくらいは容易いのだろう。

「お主には別の世界での新たな生を用意しよう。なるべくお主の願いも聞き入れる。こんな事で償いにしようなどと、お主から見れば軽いように見えるかもしだれん。だから、我が持つ全権限行使しても、お主の次の生が満足の行くものにしてみせよう」

全、権限——。それがいつたいどれ程のモノなのかは分からない。けれど、彼女が神のような存在であることは確かだ。そんな上位存在が言うのであれば、その力は凄まじいものだろう。

ゴクリと喉がなる。最近の出来事すら忘れていたのに、心の奥底で燐つていた炎が一気に燃え上がるのを感じた。

——渴いていた。欲していた。誰にも負けない——

「さあ！何でも申してみよ！我が叶えてやろうではないか！」

「それじゃあ——」

——愚か者だろうか。そうかもしれない。けれど、今の俺には、どうしても欲しいモノなんだ。

「誰にも負けない、才能が欲しいです」

——この後の事はほとんど覚えていない。彼女とどのような言葉を交わしたのか。呆れられたのか、笑われたのか、憐れんだのか。

——でもこれだけは覚えてる。背中を優しく叩かれたことと——

——「行つてらっしゃい」

——その優しい言葉だけは、忘却たくない

始業式とか怠くてしようがない

桜並木が満開になつた道を行く。春休みが終わつたかと思うと残念に他ならない。いやまあ、春休みを満喫出来たかと問われればそもそも無いのだが。

春休みに起きた出来事を思い出しながら歩いていくと、ポケットに入っていたスマホが着信を知らせる。学校の授業中とかで着信音鳴つちやつた時とか恥ずかしいよな？

たまたま今回はバイブルーコーチになつていたから気づけたものの、普段なら通知は切つてある為電話には出ない。俺が電話嫌いなことを知つてかけてくるんだもんな……。

そう思いながら、一向に終わる気配が無い着信を切つてしまおうかと悩むが、切つたら切つたでめんどくさいんだよな。

「はあ。仕方ねえか」

観念して電話に出ることにする。

「やつと出たか。お前の電話嫌いは治らないのか？」

向こうに怒つてている雰囲気は無い。もう諦めているのだろう。へへっ（勝ち誇った顔）

「何の用だよ？」

「用が無ければかけては駄目なのか？」

「ああ駄目だね。俺の平穏な日々が壊れちまう」

「つれないな。仕事の話だ」

それを聞いた途端自分で何かが変わる。普通の学生じやいられない。いや、そうなることを望んだのは俺自身なんだ。我が儘と言ふものだろう。

「内容は？」

「駒王町にはぐれ悪魔が逃げ込んだとの情報が入った。対象は二体。片方は神器持ちだ。数日前に教会の戦士と殺り合つたらしく、手負いの可能性がある。見つけ次第始末してくれ」

電話の相手から告げられた内容に思わずため息が出た。

「一応、ここは魔王の妹の領地ってことになってるよな？何で態々死地に飛び込むんだ？自殺願望者か？」

この駒王町を管理しているのは四大魔王の“妹達”。レヴィアタンとルシファーの名を冠する現魔王は、己の妹達を溺愛している。そんな彼女達が領地だと思つている場所で事件など起こしてみろ。魔王を敵に回すことになる。そうじやなくても、その魔王の妹達は才能に溢れてるそうじやないか。木つ端悪魔じや相手にならんだろう。

「さてな。悪魔の命など知らんが、無辜の民が犠牲になるのは見過せん。既にそちらにAIN達を送つていて。お前が負けるような事は無いと思うが、必要とあれば頼るがいい」

「へーへー。俺一人で十分だつての」

「しかし……」

「あーー！やつべーー！全力ダッショしなきや遅刻しちゃうなー！電話とかして余裕無いわー！じゃな！」

長くなりそうだったのでから無理矢理にでも切ろうとする。ぶつちやけ本当にいい時間だから急がなくちゃいけない。急いで電話を切ろうとするも、相手の才能で妨害される。

「まつたく…………仕方ない。では最後に1つだけ。組織から四人、駒王学園に編入させた」

「…………はい？」

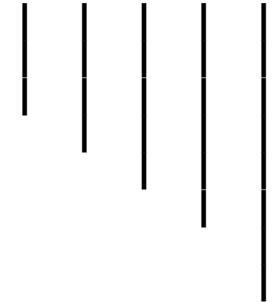
「ではな」

「ちよつま…………切りやがった」

いや元々切る予定だつたけど…………編入だあ？しかも四人も？誰だよ。

誰でも良いが、俺の平穏を壊さないで貰いたいね……。

始業式も無事終わり、それぞれのクラスに戻った俺に待っていたのは……。



「今日から皆の新しいクラスの仲間を紹介するぞ。入つてくれ」

教壇の上に立つてゐる担任が言つた言葉に今朝電話で聞かされた事が過る。

『組織から四人、駒王学園に編入させた』

誰だ、誰が来るんだ。

教室の扉を開けて入つてきたのは、白色の短い短髪に端整な顔立ちをした青年と、長い銀髪と青い瞳を持つた冰のような印象を抱かせる少女。

「皆さん初めまして、僕はフランスから来た、シャルル＝アンリ＝デュランと言います。日本の事は分からぬ事が多いので、教えてくれると助かります。よろしくお願ひします」

「アナ斯塔シア＝ニキフォロフ…………よろしく」

先に青年が、後に少女が自己紹介をした。つつてもアナ斯塔シアは名前を言つただけだがな。サンソンを見習え。おつと、今はデュランだつたか。

「うおおおお!! 美少女キターーー!!」

「きやああああ!! 木場くんと並ぶイケメンよ!!」

「アナ斯塔シアちゃん……イイ。踏んでもらいたいハアハア」

「くつ、優い系王子様……いえ、これは見たことが無いイケメンね……。是非とも木場くんとの絡みを……」

クラスの大半がトリップしてやがる。まあ、アイツら顔は良いからな。二人はクラスの熱気に若干……かなり引いてるけど。

「よーし、今日はこのあと入学式の準備があるから遅れずに体育館に集合な。それまで編入生と交流しとけよ~」

そう言つて退出する担任。そして我先にと編入生へと群がるクラ

スメイト。二人は成す術も無く飲まれるのであつた……南無南無。

「クソツ、また新たなるイケメンが来たか」

「いやしかし！アナスタシアちゃんは美少女！しかもクール系！滾りますぞお！」

「駒王学園美少女ランキングが変わるか……？　早くアナスタシアちゃんの裸体を見たいぜ……」

そんな会話がする方へ目を向けると、下衆い顔をしながら編入生……アナスタシアを見つめる三人組。危ない（確信）。

アイツら三人組はこの学園の有名人だ。有名人と言つても負の方でだけどな。変態三人組と呼ばれるくらいに問題行動ばかり起こす奴ら。だけどその内の一人が……なあ。

転生してから暫くたつてから、転生前の記憶が戻つていた。とは言つても、転生前の名前と家族や親しい友達の事は思い出せず、自分の好きな事や学んでいた知識のことばかりだつた。恐らく転生後の生活に支障をきたさない為だろう。転生前の家族の記憶があれば、転生後の家族に違和感などを覚えてしまう、とか。

まあ、結局は神のみぞ知るつて奴かね。

俺はスマホを取り出し、時間まで暇潰しをする。転生前の世界とそつ変わらないからな。好きだつたスマホゲーも出てきたから助かるぜ。名前が微妙に違つていたりするけどな。

ゲームを起動する前にLINEが届いた。相手は……。

「アイツも来てんのかよ。ああ、そういや四人だつたか」

メッセージの内容はシンプルに、屋上にて待つ、だつた。

俺はチラリと二人を見ると、サンソンが困つたように俺を見ていた。隣に居るアナスタシアは気分が悪そうだった。アイツは人見知りだからなー。それに心の壁分厚いし。

「しゃあねえか」

ここで才能を暴発させられちゃ堪らんので助けることにする。二

人に群がつているクラスメイトへと近づいて声をかける。

「おおーい。そこら辺にしとけよ。初対面の人間にいつぺんに喋られても混乱するだろ」

クラスメイト達は俺の方へと向いてハツとする。

「そ、そうだよね。ごめんね」

「い、いや、謝ることは無い。でも今度からは少しずつにしてくれると嬉しいな」

空気がギクシャクしてしまつたな……。まあ良いか。さつさと二人を連れ出そう。

「ニキフオロフ……さん。気分が悪いなら保健室に案内するけど？」

ちくしょう。呼び慣れないからちよつと戸惑つちゃつたじやねえか。

俺の心を見透かしたように、アナスタシアはクスリと笑う。

「ええ、お願ひできるかしら」

氷のような冷たい印象を抱かせる無表情から一変、小さく微笑んだ。それは周囲に居たクラスメイト達の心を射ぬいた。

「「「アナスタシアちゃんしゅき……」「」」

恐るべしアナスタシア。次の瞬間にはまた無表情に戻つたけどな。

「それじゃ案内するよ」

「助かつたよ。ありがとうジヤック」

「おい。この学園では霧崎朱鳥きりさきあすかだ。間違えるなよ？」

「分かつたよ」

教室から出た俺達は、メッセージを送つてきた相手に会うため屋上へと向かっている。入学式の準備にはまだ時間があるから大丈夫だろ。

「だけど、もう少し早く助けて欲しかったわ。もう少しで凍らせてし
まう所だつたもの」

アナスタシアは薄ら笑いを浮かべながら言う。コイツがそんなこ
と言うと洒落にならねえ……。

「悪かつたな。でもお前らだつて、社会性を身に付ける為めとかなん
とか言られて来たんだろ？」

「あれ？ノイマンから聞いてないのかい？」

「あん？」

「私達がここに来たのは、ノストラダムスの予言があつたから」
「予言、ねえ。それは当たるのか？まあまあ外れるノスのだぜ？」

俺の言葉に苦笑いを浮かべるサンソン。そう言うのも仕方の無い事だと分かつてゐるんだろう。かのノストラダムスの“廻り者”。彼の才能によつて予言された事は、過程はともかく結果は変えようが無

い。彼の予言の的中率はおよそ70%。だからまあまあ外れるんだよ。しかし、本当に大事な事は当たる。つまりその予言によつてコイツらが来たと言うことは……

「そんなに大事なのか？」

「ああ。歴史が動くらしい。それも、あらゆる神話勢力を巻き込む全世界レベルで」

「その中心が、ここだと？」

二人が頷いた。マジかあ。それってつまり、原作の事だよな……。あの変態か……あの変態かあ（二回目）。あの変態性を目にする、マジかしか出てこねえ。

「僕達がこの学園に来たのは、予言の時に備えること。それと同時に、学園生活も楽しんでおけとノイマンが……」

「…………だいたい把握した。それで、お前達の他には誰が来てるんだ？」

「それは――」

「それは屋上についてからのお楽しみよ」

デュランの言葉をアナスタシアが遮る。イタズラを思い付いた少女の笑みを浮かべて、俺の手を取る。

「さ、早く行きましょう」

「引っ張るなつて。階段は危ないぞ」

「大丈夫よ。早く早く」

そう言つて全然手を離さず階段を上がっていく。サンソンに救いを求めるがあつさり首を横に振つてしまつた。おのれ……！

階段を早足で登りながら到着した。アナスタシアと手を繋いで
ちょっとドキドキしたのは秘密だ。

「それじゃ、こ対面と行こうかね」

廻り者

屋上に出た俺達の前には三人の男女が立っていた。

赤髪の小柄な男に、長い銀髪をツインテールに纏めたキラキラと輝く少女に、肩まで伸ばしたショートヘアースーツ姿の女性。

「久しぶりだな」

「はい、お元気でしたか？」

「普通だよ。お前こそどうなんだ？ 小太郎」

赤髪の少年、風魔小太郎。組織では諜報などのサポート任務が主な役割だが、決して弱いわけではない。騎士流の決闘などを除き、戦場のような何でもアリのルールならば小太郎はめちゃくちゃ強い。

「休暇が欲しいですね。一度じっくり休みたいです」

小太郎の才能は多彩だ。風魔小太郎——戦国時代、北条家に仕えし風魔一族の長だった伝説の忍。彼は風魔一族の五代目頭目であり、その肉体と技の数々は忍の頂点を極めたとされる。

そんな風魔小太郎の廻り者であるコイツも、前世の才能を開花させ多種多様な技、忍術を使いこなせる。色々と便利だから、よく仕事に同伴させられるんだ。

「今度みんなでゲーム大会しようぜ。スマ★ラとかマ★カーとか」「良いですね。その時は負けませんよ」

俺と小太郎が話してると銀髪の少女が俺に抱き着いてき——!?

「アスカ久しぶりねー！もう、全然ホームに顔を出さないから心配しちゃつた！」

「よお、マリー。お前も元気そうだな」

銀髪の少女——マリー。彼女は非戦闘員のはずだが、何故この学園に……？

「彼女も今回の長期任務に選ばれたのよ。彼女の才能は直接戦闘系じやないけど、それでも強力な部類。自ら立候補したんだから」「…………AINシユタイン」

最後の女性、AINシユタイン。その名が示す通り、彼女は天才物理学者、アルベルト＝AINシユタインの廻り者である。

「まさかお前も編入してくる訳じゃ無いよな？」

「そんな訳無いでしょ。私は付き添いよ。それとこの町の座標登録も兼ねてね」

彼女は不機嫌な顔をして俺と目を合わせようとしない。相変わらずか……。

俺とAINシユタインの間に居るマリーはキヨロキヨロと俺達の顔を見て頬を膨らます。

「ダメよAIN。同じ仲間なんだから仲良くしないと」

に
めつーと言ふ風に注意されても、AINシユタインもバツが悪そう

「うう……マリー……」

「ふーんだ」

おろおろとしだすAINシユタインに、可愛らしくふーん！とそつぽを向くマリー。

「態度……悪かつたわ」

「いや、気にしてねえよ」

渋々と言つた感じで言うものだから、苦笑いしてしまう。彼女は男性が苦手だ。嫌い…………とまでは行かないらしいが、過去にあつた出来事が原因だと聞いている。

AINシュタインの謝罪を聞くとマリーは笑顔でAINシュタインに抱き着いた。

「ふふふつ。やっぱり仲間なんだから、仲良くしないとね」

AINシュタインは照れた様子でマリーの頭を撫でている。

マリーには頭が上がらないぜ。サンソンや、そんな羨ましそうに見るんじやないよ。

マリーとAINシュタインの戯れを見ていると、アナスタシアに制服の袖を引っ張られる。

「AINの機嫌が悪いのは、ここに来る前にあつた任務のせいなの」「ちよ、言わなくて良いってばあ！」

「任務？編入前にか？」

「ああ、対した任務じゃないよ。日本神話に報告してたのさ。僕達廻り者が駒王町に長期滞在するにあたつて、そのバックアップをね」

成る程。確かに日本神話が後ろについてくれるのは良いことだ。神話勢力がバックに居ると居ないとじや大きな違いだからな。

「だけど何でAINシュタインが不機嫌になるんだ？」

「僕とAINシュタインが日本神話の遣いと話したんだけど、その時に向こうが少々“差別的”な言葉を言うものだからね。不機嫌になつたAINシュタインに任せたわけもなく、僕が全て進めたよ」「差別的、ね……」

人間だと見下したか？もしくは女だと見下したか？ どつちでも良いけど、そんな遣いを寄せすなんて日本神話も程度が知れる。それにホームの仲間を悪く言われるのは気分が悪い。

「ふふっ」

「ん？ なんだよマリー」

「いーえ？ ただ、やっぱリアスカは友達思いなのね。素敵だわ」

顔に出てたか……？ やれやれ、マリーには敵わんな。

「それじゃ、そろそろ私は帰るわ」

「もう帰るのか？ 昼過ぎには学校終わるから、皆で飯でも食いに行こうと思つたんだが」

「気持ちだけ受け取つておくわ。次の任務もあるし」

アインシュタインの空間転移は強力だ。何せ一秒未満で世界中のどんな所にでも行けるのだから。ただし自分が行つた事のある場所限定だけど。それでも強力なものは強力だ。小太郎と同じく、色んな任務に選ばれている。

「そつか…………それじゃ、またな。ノイマンや皆にもよろしく」

「ええ。ああそれと、『教授』と『伯爵』が会いたがつて居たわよ。たまには顔出しなさいよね」

教授と伯爵が――。あの二人、俺に対して過保護なんだよなあ。伯爵は悟られないようにしてるけど、教授はオープンドからな。別に嫌じや無い。ただ…………氣恥ずかしいと言うか…………。高校生になつて両親が学校のイベントに来て全力で応援してくる、みたいな。正にそれなんだけど……。

「…………うん、たぶん、きっと、帰るよ」

「随分と長い間があつたわね。それにあやふやだし。まあ良いわ。困るのは私じゃないもの」

「マリー、アナスタシア、元氣でね。寂しくなつたらいつでも電話してね……！」

「え、ええ、分かつたわイン。でもちよつと手を強く握りすぎ……」「分かつたわ！貴女も元氣でね！」

「二人の手を握り鼻息を荒くして近づくAINシユタイン。危ない（確信）。あれ？コイツこんなに変態だつたつけ？」

若干アナスタシアが引いた所で、マリーがAINシユタインに抱き着いてアナスタシアと距離が離れる。良いぞ。ナイスフォローだマリー！

マリーに抱き着かれた事で幸せそうにやけながら、しかし名残惜しそうに、才能行使するために離れた。

「コホン、えー、男共！女の子に変なことしないように！したら私が飛んで来るからね。それと敵を近付けさせないこと！指一本とて触れさせちゃ駄目だからね！それと――」「分かつたから早く帰れ！」

コイツ本当に心配性だな！女性限定で！

AINシユタインは不服そうにしながら、才能行使した。パキン、と言う機械音と共にAINシユタインの姿が一瞬で消える。

「やつと帰つたか……」

「彼女は今回の任務にアナスタシアとマリーが来ることに反対だつたからね。教授やノイマンの説得と、最後はマリーとアナスタシアの熱意に動かされたんだよ」

「成る程ねえ。でもマリーとアナスタシアが自分から立候補するなんて珍しいな。学園に通つてみたかったのか？」

確かにマリーとアナスタシアだつて年頃の女の子なんだし、そりや

学園生活にも憧れるよな。俺としても、二人みたいな可愛い子には物騒な世界から離れて平和に暮らして欲しいとも思う。まあ、それが出来なかつたから組織に所属している訳だが。

俺がそう考えていると、何やら冷たい視線を感じた。

「…………まあ、良いわ。別にこれからなんだし」

「駄目よアナ斯塔シア、ちゃんとアタックしないと。恋はいつだってハリケーンなのよ」

「マリー。それはいつたい誰から教えてもらつたんだい？」

「あ、それ黒髭殿が言つてました」

「今度処す」

四人がヒソヒソと話している。なんだよー。仲間外れかコラー。お兄さんそう言うの良くないと思います！

「ええ、貴方の言うとおり。私達が名乗り出たのは、学園生活と言うものに憧れたから。それ以外の理由なんて無いわ」

淡々と喋るその姿に、妙な圧を感じた。

「え？ 何か怒つてます？」

「いいえ。怒つてなんか無いわ。ただ、そう、気合いをいれているのよ」

「氣合い？ これから原作…………ノスの予言が当たるからか？」

「手始めにこの学園を案内してもらえるかしら？ 良いわよね」

「言い切りやがつた……!?」

「いや、俺は入学式の手伝いに行かなきゃ——」

「それなら！後で先生に話しておくわ。アスカは私達がお願ひして無理に案内してもらつたつて。それなら良いでしよう？」

断る理由をマリーに潰された……!!

別に案内するのは良いんだけどな。俺もなんだかんだ言つて久し
ぶりに会えて嬉しいし。

「そう……だな。分かつた、良いよ。後で先生へのフォローよろしく

「ええ、もちろん!」

断る理由なんて、最初から無かつたようなものだ。俺はコイツらに甘い。いや、コイツらだけじゃなくて、ホームの皆だな。例え俺が、■■■■■■■の廻り者だつたとしても、ホームの皆には手を出したくない。この才能に飲まれる事無く、ずっと――

学校が半日で終わつたら嬉しくね？

「——つて、感じだな。覚えたか？」

「ええ、大丈夫よ」

屋上から離れてこの学園をあらかた案内し終えた。特に他の学校と変わつた所なんて無いんだがな。あるとすれば……やつぱりアソコだ。

「ねえ、アスカ。あの建物は、旧校舎つてやつかしら？」

お、マリーが気づくとはな。質問に對して首肯で答える。するとマリーは目を輝かせた。なんで？

「私知つてるわ！旧校舎には人体模型があつて、夜な夜な動き出してるのよね？それとトイレの花子さんや音楽室のベートーベンとか——」

「ストップストップストップ。マリー、色々混ざつてゐるから。全部が全部旧校舎の話じやないから。それに今時の学校に、そんな怪談は無い」

「え？ そうなの？でも、アマデウスに日本について聞いたら」

「OK、アイツは今度しばく」

「やはりアマデウスか。いつ決行する？僕も同行しよう

「サンソン」

マリーに間違つた知識を与えるなど許さん。次にあつた時には必ずしづく。そう、俺とサンソンは固く誓つた。

「トイレの花子さんは居ないのね……。残念だわ。一緒に写真でも撮ろうかと思っていたのだけれど

「そんなこと考えてたのかよ……」

てかトイレの花子さんと写真撮影つてなに？まさかツイ★ターやらイン★タ★ラムなんかに投稿すんのか？

…………ちょっと反応が見てみたいかも。『美少女と写るトイレの花子さん！』とかトレンドに来たら吹く（確信）

「あははは…………まあ、七不思議は無くとも、それとは違う存在が居るのは確かですよね」

小太郎が苦笑いしながら言つた。そうだそ�だー。この学園には悪魔なんて言うファンタジーな存在が居るんだぞー。

…………前世の才能を開花させた廻り者、て言う俺らが言えた事じやないか。俺らの存在も、十分ファンタジーだよなあ。

と、遠い目をしながら呟いていると、知つた気配が近づいてくる。ああ、これは今から方向転換しても無駄だな。すぐに気づかれるし、或いは既に気づかれてる。

俺の次に小太郎が気付き、その次がサンソン、その後はアナスタンアとマリーが同時に気づいた。

「朱鳥殿……」

「ああ、噂をすればなんとやらつてな。来るぜ。下手な事は言わないでくれよ？あの魔王の妹サマにバレると面倒だ」

「分かつてるよ。僕達は今日、この学園に編入してきた普通の学生だ」「それで良い」

会話もそこそこに、廊下の曲がり角から現れたのは、美しい紅い髪に日本人離れした肉体を持つ美少女と、艶やかな黒髪をポニーテールにした大和撫子を思わせる美少女。

この学園に知らぬ者など居ない有名人。二大お姉様こと、リアス・グレモリーと姫島朱乃だ。

二人は此方に気づくと…………いや、姫島朱乃は俺に気づくと、さつ

きまでリアス＝グレモリーと話していた笑顔とはまた違う笑顔をして此方に向かってきた。何で来るんだよ。ちょっと歩くスピード速くしてんじゃねえ。

あつという間に距離を詰められて姫島朱乃は手を伸ばせば届く距離に居た。

「お久しぶりですわね、朱鳥くん。お元気でした？春休みはどうでした？」

嬉しそうに話しかけてくる姫島朱乃。それに対し俺はあくまでも後輩と先輩の関係であると言ふように

「お久しぶりです、姫島先輩。俺は元気でしたよ。春休みも充実した日々を送っていました」

ただ聞かれた事だけを答える。此方から話題を振るなどしない。それと何故か後ろから来る冷気が恐い。え、アナスタシアさん？何故に不機嫌？（震え声）

まさかの味方からの攻撃（？）に冷や汗を書いていると姫島朱乃の後ろから来たリアス＝グレモリーが、俺の後ろに居る編入生に気づいた。

「あら？ その子達は始めて見る顔ね。編入生かしら？ 初めまして、三年生になるリアス＝グレモリーよ。よろしくね」

自称この町の管理者。日本神話に許可取つてんの？ 取つてなかつたら外交問題だから、たぶん取つてはいるんだろうけど……いやどうなんだろう。無許可で他神話勢力の土地に来て管理者を名乗るなんて、そこまで悪魔は愚かじやないと願うね。

リアス＝グレモリーに対してマリー、サンソンは笑顔で対応する。小太郎とアナスタシアは無表情だ。小太郎は純日本人で日本神話と

も縁があるから、勝手に領地にしている悪魔には良い印象は無いだろうな。アナスタシアは純粋に興味が無いだけか。

「ほら、朱乃も自己紹介しなさいよ」

「ええ、ごめんなさい。私は姫島朱乃です。この学園で困ったことがあつたら頼つてくださいね？」

理想的な先輩像だな。男女ともに頼りにされるお姉さんって感じだ。それが貴女の弱さでもあるわけだが。

「それではグレモリー先輩、姫島先輩。自分は編入生に学園の案内をしている途中ですので、これで失礼します」

早くこの場を離れたい。離れなきやいけない。

二人に対しても軽くお辞儀をして通りすぎようとする。

「あつ——」

姫島朱乃が何かを言いたそうにしていたが知らない。俺は皆を連れて速足でその場を去っていく。

「……朱鳥？どうしたのかしら？」

「別に、なんでもねえよ」

ある程度離れた所で、アナスタシアがこちらを気遣うように聞いてきた。

それに対して少しうつきらぼうに返してしまった。こんな子供みたいな嘘、すぐに分かつてしまう。いや、こんなのは強がりだ。

「まつたく。男の子つてどうしてこう強がりなのかしら。ねえ？小太郎、サンソン」

「ええ……？僕達に振るのかい？僕は朱鳥と比べて素直だと思うけど」

「はい。僕も朱鳥殿に比べれば分かりやすいとは思いますが」

はははは、よく言った。

「うーん。サンソンはもつと私と同じように皆と接してみたら良いと思うわ。そうすれば、もつと皆と仲良くなれるわよ！小太郎は辛いとき黙つてる事が多いわよね？だから、そんな時ほど言つて欲しいの。ね？」

マリーが全て言つてくれた。でもマリー？サンソンが皆に、お前と同じ態度をとつていたら、アイン辺りが気味悪がると思うぞ？

小太郎は何でもかんでも自分で解決しようとした過ぎ。もつと周りに相談してくれ。それでも昔よりは改善されたんだがな。

マリーの言葉に恥ずかしそうに俯くサンソンと小太郎。うーん、青春だなー。

微笑ましい物を見ていると、マリーが此方に向く。

「それで！アスカはどうしてあんな態度だったの？教えて欲しいわ」「マリー………」

純粹な好奇心だろうか。それもあるだろうが、やはりマリーも心配してくれているんだろう。そんなに表に出てたかな？

「さつきのあなたは、あの入達から離れたがつてた。確かに人付き合いで苦手なコミュ障のあなたでも、あそこまで明確に拒絶しているのは始めて見たわ」

「コミュ障言うな。いや、そうか……皆には見抜かれてたのか……。

「先に言うと、俺はあるヒトの事が嫌いな訳じゃない」

「じゃあ、どうして?」

どうして……か。

「あの人は距離が近いんだよ。初対面の時からな」

「…………それだけ?」

みんな拍子抜けのような顔をする。そうだよな。俺だつてそんな反応をする。

「いくらあなたがコミュ障でも、その程度の事で拒絶だなんて」「だからちげえって。口で説明するのは難しいんだよ。何て言うか……完全な初対面であるはずなのに、向こうはずつと前から俺を知っていたように挨拶してきた。まるで久しぶりに会う友達みたいにな。だけど俺の記憶には、姫島朱乃と会った記憶なんて無い。この学園に入学してからが初対面のはずだ。もしもあの人人が俺を知っているとなると……」

それは俺が廻り者になる以前の事だ。

四人ともその事に気づいたようだ。俺達はみんな完全に廻り者として覚醒している。故に廻り者になる前の記憶など無くしている。どうして輪廻の枝に手を出したのか、廻り者になつてからは覚えていふため、組織に居ることに違和感を感じることはない。

過去の自分。己の無力さに、才能の無さに絶望し、諦め、喉をカツ切つた。アソツは俺達の事を臆病者だと言つた。軟弱者だと。そうだ。俺達は逃げたんだ。何も出来ない自分から――。

その時の己を知る者が現れれば……どのような気持ちか。否定されるのが怖いのか……。俺は……よく分からぬ。だから言葉に出すのも難しいんだ。今もあやふやに誤魔化してる。

姫島朱乃。あの人にはいづれ救われる。主人公によつて。俺がして

ヒーロー

やれる事は何も無い。例えあの人と俺が、本当に昔会っていたとして
も、あの人気が知っている俺はもう居ない。関わらなくて良い。少なく
とも今は。いざれ相対する事になるかも知れないのだから……。
四人もそれぞれ思考の海に沈んでいるのか、誰も言葉を発しようと
はしない。

しまつたな。ここまで重くするつもりは無かつたんだが……。
つい溜め息を吐いて後頭部をポリポリと搔いてしまう。

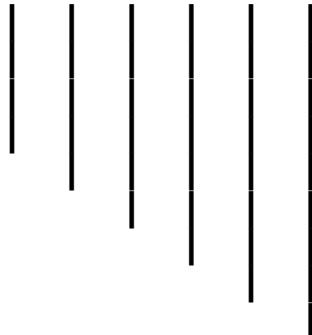
「うし、今日はもう帰るか!!」

強引に話題を変えることにした。じゃないといつまで経つても重
い空気のままだ。

「言うつもりは無いのね……」

「言つただろ。俺だつて言葉が出てこないんだ。だからこれで終わ
り。さ、帰るぞー」

強引に話を切り上げてその場を離れる。あーー、腹減ったな。



「そう言えばお前ら住む場所はどこなんだ?」

学園から少し離れた場所にあるファミレスで俺らは昼食を取つて

いた。

編入してきた理由については納得しよう。しかし住む場所は?

「僕と小太郎はここからそう遠くないマンションを借りてるよ」

「へー。ルームシェア?」

「いや、部屋は隣同士だけど完全に一人暮らししさ」

成る程な。サンソンと小太郎は一人暮らし、と。

「ん? それじゃ、マリーとアナスタシアは?」

「私達はあなたの家に住まわせて貰うわ」

What? 何やら嘘であつて欲しいことを言われた気が……

「はどうん?」

「下手な英語を使わなくとも良いわ。私達は、あなたの家に住まわせて貰うと言つたの。これからよろしくね」

なつ――

「なにいいいいいいいい!!? 聞いてないぞ!!」

「ええ、今日初めて言つたもの」

「俺の許可は!?」

「諦めなさい。これもノイマンと教授の指示よ。教授は面白半分のようだけど」

なんて事だ……。つまり、絶賛思春期の男子高校生の家に美少女二人がホームステイだと……? それなんてラノベ? あ、原作はラノベか

(=)

「うふふふ。これからが楽しみね」

嗚呼……マリーの輝かしい笑顔が癒しだよ……て、マリーも住

むのか……。

遠い目をしている俺にサンソンが肩をポンと叩く。

「言つておくが朱鳥。マリーに手を出したら許さないぞ」

「わかつてゐる…………わかつてゐから。そんなドスをきかせた声で喋らないでくれ。て言うから

「それだつたらお前がマリーと住めば良かつただろ。マリーと二人暮らし、お前にとつちや天国だろ？」

「そう言うとサンソンは黙つて俯いてしまつた。

あれ？そこまでシヨツクだつたのか……？

しかしあ細い声で何かを言つているのだけは聞こえた。

「何？なんだつて？」

「反対されたんだよ…………あの変態音楽家に…………お前にマリーは任せられないとか、お前とマリーを一つ屋根の下に二人きりにさせると何をするか分からぬだとか…………。まつたくもつて遺憾だ。僕がマリーに何か…………そう、いやらしい事をするような人間に見えているのか。お前と一緒にしないで欲しいと言つたよ。あの人でなしの変態音楽家め。今度あつたら――」

おおう…………サンソンがトリップしてしまつた。これは地雷だつたか。やれやれ、相変わらず拗らせてんな。

「あ、でもお前ら荷物はどうしたんだよ？俺の家に住むにしても、荷物は？」

「私達の荷物は同盟の証として、日本神話の方々とホームの何人かが運んでくれる予定なの♪たぶん、もうアスカの家には届いてるはずよ」

何で引っ越しを手伝う事が同盟の証になるんだよ。同盟締結していきなり引っ越し手伝つてとか厚かましいだろ。て言うかよく了承したな日本神話。

「あー、てことは今黒歌が困つてるだろうなー」

「黒歌？ああ、あの妖しの。確か、朱鳥殿が三年くらい前に拾つたんですね」

「そうだよー。今じゃ家には欠かせない存在だ」

いやホントに。掃除に洗濯に料理、買い出しも行ってくれてるんだから万々歳。大助かりよ。そんなにしなくて良いよつて言つてゐるのにやつてくれるんだから……いやー、幸せ者だなー。

「あらあら、ライバルね！アナスタシア」

「な、何を言つているのかしら。そんな……」

「でもアスカがあそこまで言つてるのよ？うかうかしてたら先を越されちゃうわよ？」

アナスタシアとマリーは内緒話をしているのか全然内容が聞こえない。口元も隠してるから読唇術も通用しないし。

「これが青春と言つやつですか

「たぶん……？」

小太郎とサンソンはわかつてゐみたいだし……なんなんだよ？

そうして、穏やかな時間が流れる午後を過ごした俺たち。友達と一緒にファミレスでダラダラと駄弁り続ける。普通の学生がやつていることだが、今この瞬間だけは、何ものにも代え難い宝物だ。

引っ越しした後は回りの物を揃えるのが大変なんですが

あれからファミレスを出て俺の家に向かつてる途中だ。

たわいもない話をしながら夜道を夕日に照らされてる町を歩く。話している内容は最近のホームでの出来事だったり、俺の学園生活みたいな……半分はどうでも良いことだ。サンソンや小太郎からは、一人暮らしについてのアドバイスを求められた。とりあえず冷蔵庫と電子レンジと洗濯機は必需品とだけ伝えておいた。やっぱり文明の利器つてスゲーや。

ホームには3月の頭に行つたから、1ヶ月ほど顔を出していないのか。そこで3月の時が3ヶ月ぶりとかかな？ でもこれつて高頻度だと思う。だつて俺以外にも長期間顔出していない奴いるし。あの灰色剣士とかな。

「あなたは別に遠征組じやないでしよう？ ホームに住めば良いのに、一人暮らし始めちゃうんだから」

「さらりと心を読むなアナスタシア」

「あら、ごめんなさい。つい魔眼が疼いて」

「中二乙」

まつたく。俺のプライバシーを守つて欲しいもんだぜ。それに魔眼をそんな事に使うなつての。

そうしていると小太郎が何かを感じ取つたようだ。

「朱鳥殿。はぐれ悪魔の潜伏先が判明しました。夜にでも実行しましょう」

あー、はぐれ悪魔ね。ちよつと忘れかけてたわ。放つておいてもあのグレモリーに討伐される事は確定だろうが、それだとこの町で被害者が出ることになる。いや、或いはもう出ているのかもしれないが

……。

「OK。じゃあ、日が落ちたら行くか」

俺の言葉に皆が頷いた。

「さつきのはあれか？分身が見つけたのか？」

「はい。学園に行く前に町中に分身を放つておいてたんです。隠れるのが上手かったようで、少し時間が掛かりました」

「いや、それでも凄いよ」

やつぱ小太郎はスゲエな。これで戦闘もこなせるんだから、伝説の忍の廻り者は伊達じやねえってか。

まあ、今回は正直俺一人でも十分なんだが……コイツらが居たら楽に終わるのは確かだな。

そう言えば、マリーと一緒に戦うのは初めてかもしれない。サンソンや小太郎は勿論だが、アナスタシアとも意外と共闘したことあるんだよな。

つーか今思えば、俺転生してからの人生濃過ぎだろ。激動過ぎだわ。俺つて働いてるなあ……。

「なんだか朱鳥が遠い目をしているわ」

「大丈夫かしら……」

「何かあつたのでしようか」

「うーん、彼はあまりホームにも顔を出さないからね。定期検診にも来ていなかから心配だよ」

後ろの会話は全部聞こえている。定期検診……定期検診かあ……。俺つて他人にじろじろ裸見られるのが嫌なんだよ。あとよく知らない人に触られるのも好きじゃない。転生前はそうじやなかつたのに、きつと廻り者になつてからだな。

そうして歩いていくと、俺の家に着いた。

家の前には黒スーツを来た男達が10～15人ほど集まっていた。
気配からして人間じゃねえな。

その男達と睨み合つて……てか一方的にガン飛ばしてるのは黒歌とオーフィス。はあ、やつぱりか。

「おーい、黒歌～、オーフィス～。ただいまー」

「！朱鳥！お帰り！」

「ん、お帰り朱鳥」

俺が家まで駆け寄ると黒歌とオーフィスが抱きついてきた。
おおふ……女の子の柔らかい感触が最高……じゃなくて。

「はいはい、すまんが離れてねー。あなた達は日本神話の者で良いか
？」

黒歌とオーフィスを引き剥がし……オーフィスは無理だった。
家の前でたむろしていた男達にそう聞くと、一人が一步前に出てきた。

「その通りです。我々は日本神話の使いの烏天狗。ここは霧崎朱鳥殿
のご自宅で相違無いか？」

「ああ、間違いないよ。あなた達は引っ越しの手伝いをしてくれたん
だつて？ありがとう」

「いや……」

ん？どうしたんだ？凄い視線をさ迷わせてるけど……

「そうにゃ！朱鳥どう言うこと?!いきなり日本神話がやつてきて、
引っ越しを頼まれたので上がらせてもらう、なんて言つてきたのよ
!？」

あー、成る程。つまり、ずっとここで睨み合っていたと。それでも
だ引つ越しは終わっていないと。

「黒歌。俺もこの事を知ったのはつい2時間ほど前だ」
「にやんと!?」

「こうなることは分かつてたのにな……。いや、これは黒歌は悪くない。
そして鳥天狗の方々も悪くない。

「すまなかつた。とりあえず、荷物だけ中に入れてもらつても良いだ
ろうか? 荷ほどきはこちらでやつておくから」

今回は俺の責任もある。事前に電話すれば良かつた。コイツらと
会えたのがそんなに嬉しかつたのか……。

「うむ……。では、そのように」

男達が懐から何枚かの呪符を取り出すと、その呪符が様々な家具や
荷物が入つたダンボールへと変わつた。

「小太郎、まだ分身は出せるか?」

「勿論です」

「よし。ならサンソンと小太郎は荷物を家の中に運んでくれ。アナス
タシアとマリーは荷ほどきを。俺も直ぐに行くから」

そう言うと皆は即座に動いてくれた。この場で出来る事が無いと
分かつっていたからだろう。
それにしても……。

「…………ゴクリ」

恐らく烏天狗達のリーダーが黒歌を…………いや、オーフィスを見て警戒している。

そりや世界最強の片割れが目の前に居たらビビるか。

「安心してくれ。アイツは俺達の味方だ。決して日本神話を害する事はない」

「…………その言葉、信じても良いのだな？」

「ああ。もしもアイツが厄介事を持ち込んだら、その時は俺が対処する」

遠回しに組織の連中は無関係だとも伝えておく。ちゃんと理解されたか知らんが、この烏天狗が優秀な方だと信じておこう。

「…………承知した。では、そのように主神様と総大将には伝えておく」

主神様つてのは天照サマで、総大将つてのは九尾の姫さんの事だろう。

九尾姫さんには片手で数える程度だが会ったことがある。初めは廻り者関連で京都に行つた時だつた。その時に色々あつて……まあ、気に入られたと言うかなんと言うか……。そこから日本神話とのパイプ作りが円滑になつた。機会があればまた話すとしよう。

兎に角、日本神話と妖怪勢力は俺達の組織と友好的な関係だ。オーフィスが居るからと言つて即座に敵には回らないだろう。

…………大丈夫だ。もしもこの世界が、原作通りに進むのだとしても、まだ半年は猶予がある。アイツらが馬鹿な事を仕出かす前に、なんとかオーフィスに縁を切らせたいんだがなあ。現状は上手くいつていな。

思考に耽つていると、全ての荷物を運び終わつたのだろう。烏天狗達が烏天狗達が出てきた。

「ありがとうございました。それじゃ、九尾の姐さ……総大将と主神様に今後ともよろしくと伝えて欲しい」

「確かに承つた。では、さらばだ！」

彼らはまた呪符を取り出して転移術を行使する。淡い紫色の光に包まれると、そこには烏天狗達は居なかつた。

飛んで帰る訳じや無いのか……。

「さて、荷ほどきだな。一段落したら——」

「朱鳥殿、朱鳥殿」

小太郎が焦つた様子で走つてきた。おお、どうしたどうした。何か嫌な予感がするぞ。

「黒歌殿とアナスタシア殿が……」

——はあ。

自然とため息が出てしまつた。

「あなた……朱鳥のなんのかしら」

「私は朱鳥の家族にや。そしてここは私たちの家。勝手に決められちや困るの」

「それは合つてゐるようで間違い。この家は朱鳥の保護者兼後見人が買い取つた家よ。最終的な権利は組織にある。この家は朱鳥の家でもあり、私達の組織の社宅もあるの」

「ぐつ……」

「分かつたかしら？・猫さん」

…………なあにこれえ？（遠い目）

家に入るとリビングで黒歌とアナスタシアがスタンンドを顕現させながら舌戦をしていたでござる。

でもアナスタシアが勝ちそうだな……勝ち負けの問題じや無いけど。

確かにアナスタシアは正しい。でも言い方つてものがあると思うんだ——つて

「オーフィスオーフィス、皆を威圧するのは止めなさい」

ほら、お前の圧力で家がギシギシ鳴つてるから。皆も這いつくばつてんじやん。

「でも…………アイツ、黒歌いじめた」

「そうだね。それでもアイツらは俺の大事な仲間なんだ。それこそ黒歌やオーフィスと同じくらい」

「我と黒歌と同じ？」

「そうだよ。そしてこれから同じ屋根の下に住む者同士だ。仲良くしなきやね」

オーフィスの頭を撫でながら、同じ目線で話をする。丸つきり子供にするやり方だが、オーフィスに通用するのだからこれで良い。

「…………ん、分かつた」

僅かな間を置いてオーフィスの威圧が止まつた。俺と黒歌を除く皆は息も絶え絶えで倒れている。

「お疲れく。頑張つたな。気を失わなかつただけでも凄いぜ」
「ハア……ハア……流石、世界最強の龍神……格が違ひすぎる」
「まあな。俺らじやオーフィスには逆立ちしても勝てねえよ」

皆が完全に立ち直れるにはそう時間は掛からなかつた。

今日の晩飯は俺が作るかく。その間皆には交流がてら荷ほどきをしていてもらおう。

「よし、俺は晩飯の準備をしてくるから。お前らは荷ほどきをしつつ交流してろ」

「ちよ、ちよつと朱鳥……」

「アナスタシア、この家に住むのは良い。この家の権利は組織にあるつてのも事実だ。だけど管理してるのは俺だ。ここに住むからには、最低限のルールは守つて貰うぜ。その1、家の中での戦闘行為は一切禁止する。2、飯の時は皆揃つてから。その他にも色々増えたり減つたりするが、この2つは守つてくれよな。それじや、解散！」

それだけ言つて俺はそそくさと台所へ引っ込んだ。小太郎とサンソンが上手くやつてくれる事を願うぜ……。
さ、今日の晩飯は何すつかなく。

雑な戦闘回のようですか？

「——これが訓練で負けたときに悔しくて地団駄踏んでる朱鳥。これは夕飯の時に好物が出て来て思わず笑みをこぼしてしまった朱鳥」「にやく、羨ましいにやく。あ、これは昼寝してた朱鳥の寝顔」「おい待て止めろ」

どう言う事だつてばよ……。アナスタシアの部屋に入ると黒歌と写真を見せ合いっこしている……。さつきまで険悪だった二人が、今では同士を見つけた顔をして語り合っている……。

て言うか恥ずかしい物を見せるな。いつ撮つてたんだよ！

「私の撮りテクを甘く見ていたわね。そこにカメラがあり撮りたい物があるなら、私はどんな不可能をも可能にしてみせるわ」

コイツは何を言つているのか。才能の無駄遣いにも程がある。

「あらあら楽しそうね。何をしているの？」

後ろからマリートサンソンが入ってきた。どうやら向こうは終わつたらしい。

「朱鳥の昔の写真を見せていたの。黒歌は中々良い写真を撮つているわ。さつきはキツいことを言つてごめんなさい」

「別に良いにや。こうして朱鳥の写真を見てくれたんだから。水に流すにや」

「黒歌……」

なんでだろう……。凄く良い雰囲気なのに……あまり釈然としない。

何故野郎の写真でそこまで盛り上がるのか分からん。アイドル

とかなら兎も角、俺の写真のどこにそんな要素があるんだ……？

「うーん、アスカつたらこんなに鈍かつたかしら？」

「彼は鋭い方だと思うけどね。もしくはわざと知らないフリをしているのが、無意識なのか」

「これから課題ね」

頭を悩ましているとマリーとサンソンが何かを話していた。ちよつとそういうの多くない？俺も混ぜて欲しいな。

前には俺の写真で盛り上がる黒歌とアナスタシア。後ろにはこそと話しているマリーとサンソン。何このボツチ感。ヤバイ、寂しい。

ちよつとした孤独感を味わっていると背中に何かがぶら下がるような感覚が…………つてこれは

「オーフィス？」

「ん、朱鳥。我、ここにいる。朱鳥一人じゃない」

小さな手で俺の頭をなでなでしてくれるオーフィスを、俺は思わず抱き締めてしまった。

「オーフィスマジ天使!!

「？我、ドラゴン」

そうだよなー。オーフィスはドラゴンだよなー。それも最強なんだよなー。

そうは分かっても頭を撫でるのは止めない。オーフィスも嫌がつて無いし良いか。

「…………彼はいつもああなのかしら？」

「いやー、オーフィスに対してはデレデレだにや。私もそうやつて甘

やかして欲しいにや

「何言つてんだ。これでも甘やかしてる方だぞ」

……さて。

オーフイスの癒し成分も補充したし、そろそろ飯だな。

「おらー、飯食うぞ。皆下に降りてこい」

「ん、今日はなに?」

「大勢つて事もあるし、アレしか無いだろ」

「アレ??」

我が得意料理——カレーだツ!!

「驚いた………ホームに居た頃から上手いのは知っていたが、更に腕を上げたようだね」

「当たり前だろ? ホームと違つて一人暮らしじゃ俺以外に誰も料理なんてしねえからな。黒歌が来てからは別だけど」

食べ終わつた食器を皆で片付けていく。いつもは三人だけだが、今は七人だ。米もいつもより多く炊いた。ルーも多く作つた。いつもとは違う食事風景が少し、いや、かなり面白かつた。

「さて、片付け終わつたら行くぞ」

「にや? どこに?」

「決まつてんだろ」

自然と口角が上がる。

「狩りだよ——」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアア!!」

夜の工場に汚い悲鳴が響き渡る。つたく……クズはクズらしくさつさと死ねつてんだ。

小太郎の情報通りはぐれ悪魔はあつさり見つかった。2体の片方を俺一人で狩ることになった。別に俺は2体まとめて相手をしても良かつたんだが……

「流石に朱鳥殿一人に任せん訳には行きません」

と小太郎が

「君がホームを離れている間に僕達も強くなつたんだ」

とサンソンが

「私達は何も学生生活を満喫する為だけに来た訳じやないつて事を見せてあげる」

とアナスタシアが

「うふふふ。そう言うわけだから、私達の輝く姿見ててね?」

とマリーが

もう好きにしろつてことで、片方はアイツらに任せた。

「クソッ、テメエら!絶対殺してやるからなア!」

片腕を失った悪魔が何かほざいてるが気にしない。不意討ち気味とは言え、軽い挨拶程度の攻撃すらかわせないとは……。

「お前雑魚過ぎ。よくそんなんで魔王の妹の領地に侵入したな。自殺願望者つてのもあながち間違いじやなかつたか?」

手に持っているナイフを弄りながら目の前の悪魔を見つめる。全身に蛇のような鱗を生やした姿で、頭には山羊の角を生やしている。典型的な悪魔つて感じだな。

「へっ、へへへへ、俺に時間掛けてて良いのかあ？」

「あ？」

「俺は所詮下級悪魔だ。だけどなあ！ アイツは違う。アイツは神器使いとして中級悪魔としての地位を約束されてたんだ！ お前の仲間はすぐに殺される……ケケケケ……。人間ごとしが、俺ら悪魔に勝てるわけ——」

「うるせえ口だなー」

五月蠅い口はちゃんと閉じてなきや駄目だよな。だからちゃんと縫い付けてやつたぜ。

「ン”ン”ン”ツ!!」

「ああ、さつきお前言つたよな？ 俺の仲間はすぐに殺されるって。なら見に行こうか」

悪魔は一瞬呆けたような顔になるも、すぐに怒りを露にして飛び掛かってきた。

俺はすれ違いざまに悪魔の両足と残った片腕も切り落とした。

「ン”ツブ、ン”ン”ン”ン”ツ!!」

あらら。ちゃんと縫い付けたはずなんだけどなく。口から血が漏れちゃつたよ……。伯爵に教わったのにな……。

「ま、いつか。ほら行くぞー」

悪魔の角を掴んで引き摺っていく。ずっと痛みで悶えてるみたいだが知つたことか。

歩き出してすぐに目の前に何かが飛び降りてきた。

「やはり朱鳥殿の方はもう終わつたんですね」

何か——と思つたら小太郎だった。

「おー、そつちはもう終わつたのか？」

「まだです。マリー殿とアナスタシア殿だけで戦っています」

「ふーん、大丈夫そうなのか？」

「アナスタシア殿は兎も角、マリー殿にとつてはほぼ初めての実戦ですからね。しかし、ホームでの訓練が活かされたのでしょう。特に危ない様子もありませんよ」

「そつか。そいつは良かつた」

「はい。ところで朱鳥殿。ソレは?」

小太郎は俺が引き摺つているモノを指差した。見ると息も絶え絶えで、いかにも虫の息つて感じだ。

「やつべ、もう死ぬじやん」

「朱鳥殿?」

「ああ、こいつがイキつててさ。何でも、俺の仲間はすぐに殺されるとか、神器使いとして中級悪魔の地位を約束されてたんだぞ」とか、くだらねえ事ばっかり喋つてたから縫い付けた。んで、それが事実なのかどうかをコイツに見せてやろうと思つてさ」

「成る程……」

なのにもう虫の息とか。根性ねえなあ！

「でしたら先ずは傷口を焼き塞ぎましよう。いくら悪魔と言えど、血を流しすぎては死んでしまいますから」

そう言うと小太郎は掌サイズの火の玉を出して見せ、その炎を悪魔の傷口にジユツと押し付ける。

声にならない絶叫を上げ苦しむ悪魔。鼻息を荒くし小太郎を睨み付ける。

「これでよしつと……では行きましょうか」「おー」

顔色変えずに平然とこう言う事が出来るのは、やはり忍の廻り者だからか。

マリー達が戦っていた場所はそれほど離れてなかつた。工場の入り口付近で、俺がこの悪魔を追つていく内に奥へ行つちまつただけなんだが。

敵の巨大な腕をマリーがガラスのような透明な障壁を作りガードする。その間にサンソンが敵を切りつける。アナスタシアは少し離れた所に座っていた。

「よお、休憩か？」

「あら、早かつたわね。…………なにそれ？」

「んー? 捕虜的なナニカ」

「でもまだ……」
「捕虜にしては待遇が最悪ね。まあ良いのだけど。朱鳥、私眠たいわ」

あー。まあ、アナスタシアは夜更かしするタイプじゃないし、久し
ぶりの戦闘で疲れるのも当然か。それに学園に来る前に日本神話と
の会合があつたらしいし。朝早かつたのかも。

「よし、じゃあ終わらせてもう帰るか。おーーい！もう帰るぞーー！」

俺の声にマリーが振り向き手を降つて答えた。サンソンは視線だけ寄越して相手と対峙したままだ。

「マリー、君はアスカ達の元へ。後は僕がやつておくよ」

「いいの？」

「ああ、勿論だとも」

「それじゃ……お願ひね？」

そう言うとマリーはこちらへ走つてくる。

「どうだつた？」

「ええ、とても緊張したわ。でもホームの皆が鍛えてくれたもの！なんとかなつたわね」

ふうーと額の汗を腕で拭うマリー。戦闘のプロでもある小太郎が言つてたんだから間違いないか。

「サンソン、早く終わらせなさい」
「分かつてるさ」

サンソンは自身の大剣を構えゆつくりと距離を詰めていく。対する悪魔は身体中を岩石で固めたような姿をしている。ようなつてか、あれは地面のアスファルトを体にくつ付けてるのか？

「あの悪魔は地面を操れる神器を持つてているわ」

成る程な。ただの剣じやあの悪魔には攻撃が通じないわけだ。

「でも、あの悪魔の練度はそこまでじゃありませんよ。あの悪魔はアスファルトや地面を鎧のように自身に纏わせるか固めた腕を巨大化させるかの二通りだけ。あの程度で中級悪魔になれるなら、悪魔社会

も程度が知れると言うもの」

「ほーん。なら雑魚じやん」

俺らの会話が聞こえていたのか、悪魔は怒りの形相でこちらを睨み付けた。

「て、テメエら……!! 殺すううう!!」

奴の足下にあるアスファルトが奴自身にまとわり出し、みるみる内にでかくなつた。2メートルも無かつた身長があつという間に3メートルを越える巨体へ。

「おーおー。こりやまたビフォーアフター。
成長期かあ？ おいサンソ
ン、手貸すか？」

俺の言葉にサンソンは首を横に振つた。

「要らないさ。もう終わる」

サンソンは地面を強く蹴り飛び上がつた。

「死ねええええええええええええええ！」

巨大化した悪魔の拳を難なく避け。更にはそれを足場に奴の足元へと一直線に駆ける。

「己が悪行を悔いながら死ぬが良い」

サンソンの大剣は、硬くなつた奴の体を、首をあつさりと切り飛ば

した。悪魔の身体は塵となつて消えた。

「終わったよ」

「お疲れー。んじや帰ろつか」

「朱鳥殿、朱鳥殿」

「んあ？」

「それ、どうなさるおつもりで？」

……………あー、すっかり忘れてたわー。

小太郎が指差したのは茫然自失となつたボロボロの悪魔。俺がしたんだけど可哀想な奴だよな。俺は思わないけど。

「…………そいつはもう既に死んでいるさ」

「うわ、ホントだ」

死因は精神崩壊からのショック死かな？ま、どうでもいつか。

「〃火よ〃」

死んじまつた悪魔の体を軽い魔術で燃やすことにする。いやー、魔術習つといて良かつたわ。才能無いらしいけど。

「じゃ、今度こそ帰りますか」

「ええ。今日はもう疲れたわ。明日はゆっくりしたいわ」

「所がどつこい。明日から学校なんだなー」

「…………ちょっと風邪を引いてしまうかも」

「諦めろ」

「ううう」

俺とアナスタシアの会話に他の皆が笑う。さつきまで殺し合いをしていたとは思えない気軽さだ。

でも、これからだ。時代が動く。世界が変わる。その時、俺達廻り
者はどうなるんだろう。

俺は……どうしたいんだろう。

「帰宅部にとつては放課後なんて家までのRTAでし
かない」

新学期が始まつてはや一ヶ月近くが経とうとしていた。俺達の日常も事件と呼べるものはなく、せいぜいがはぐれ悪魔を狩つたり、アナスタシアやマリー、サンソンや小太郎が告白の嵐に見舞われたり、俺とアナスタシア達が同居していることがクラスの奴らにバレて野郎共に追いかけ回されたりと…………まあそこそこ多忙な毎日を過ごした訳だ。

「ん？」

何やら邪氣…………もとい、厭らしい気配を感じて見てみると、そこには兵藤一誠を筆頭とする変態三人組の姿が…………。やれやれ、アイツらも懲りないな。どうせ数分後には覗こうとした先の女の子達からリンチを受けるだろう。欲求に忠実な人間は嫌いじやないが、学習しない人間もどうかと思うな。

「どうかした？」

あの変態共で頭を痛めていると後ろから声を掛けられた。抑揚が無く、氷のようなイメージを抱かせる。

「アナスタシアか。別になんでもねえよ。世界は平和だなーってさ」「何よそれ。確かに表面上はそう見えるかも知れないわね。でも…………」

「ああ。わかってるさ」

この平和が……偽りのものだと言うことくらい。嘗ての大戦争から三大勢力は疲弊し、それぞれのトップは和平へと進みたいのだろう。しかしそれを好まない連中もいるのだ。それは内側にも外側にも――。

「堕天使がまた怪しい動きを見せてるそうよ」

「へえ？あの研究一筋な総督が何かしでかそうつてか？」

「それはまだ分からなければど…………。でも、動いているのは極一部らしいわ」

「ふうん?」

成る程ねえ。それなら誰かは予想はつく。大方あの戦争狂だろう。うちの幹部の間でも問題になつてたな。神話に名を刻んだ堕天使と真っ向から戦えば、被害は抑えられないだろう。あの戦争狂を相手に、周囲の被害も出さず完封出来る廻り者なんて何人居るよ。取り敢えず、あの世界最強野郎は除く。つーか今どこに居るのか知らねえし。あと雷電博士と爆弾野郎。…………そもそも廻り者が周囲の被害を考えるとか無理じやね……?

一人で悩み続ける俺に、アナ斯塔シアは小さくため息をついた。

「しつかりしてちようだいな。あなたは私達のリーダーなのよ?」

「そうだよな。やっぱ戦争狂程度はリーダーたる俺が…………んつ

?」

リーダー?誰が?

「俺が?なんだつて?」

「リーダー」

「oh!冗談きついぜアナ斯塔シア!」

H A H A H A H A H A H H A ★と深夜の通販番組の外国人よろしく笑いかける。俺がリーダーだと?馬鹿を言え。俺はそんなタマじやない。勝手に動いて、勝手に殺す。誰かに指示を出すなんて無理だし、ましてや戦術なんて分からない。そう言うのはカエサルやヒトラーに任せりや良いんだよ。俺は単に仕事をこなすだけ。

「別にあなたにカエサルのような事をしろと言つてる訳じやないわ。それに才能だつて違う」

ああそうさ。俺は殺すだけしか出来ない。犠牲が出る前に殺す。速く、鋭く、的確に敵の命を奪う。

「でも私が言つているのは、カエサルやましてや【項羽】のようなカリスマ性でもない。もつとこう…………私達の身近に居てくれる…………精神的に支えてくれるような……」

「アナ斯塔シア?」

段々と顔が赤くなつているアナ斯塔シアに心配になつて声をかける。気づけばアナ斯塔シアとの距離は近づき、お互いの顔の距離は数

センチまで迫っていた。

互いの吐息が当たる距離まで来た。アナスタシアの右手は俺の胸板に触れ左手は俺の手を握りしめていた。

この状況——冷静になれ、霧崎朱鳥——!!

確かにアナスタシアは美少女。それも超が付くほどの美少女だ。その肌は新雪のように白く。太陽の光に当たるとキラキラ光る銀髪はどんな宝石よりも美しい。優しくも美しい姿とは裏腹に、その心は強く、確固たる強さを持つ。

彼女との付き合いはもう数年以上になり、お互の事も程よく知っている。互いに恋人が出来たことが無いのは知ってるし——あああああもう顔近づ、睫毛長づ！肌綺麗だな——別に、このまま理性を溶かしてしまつても構わんのだろう？——

「ツツツツな訳あるかゴラア!!」

おもいつきり空いてる右手で己の顔にグーパン★
見事、幻想は碎かれた。

「朱鳥!？」

俺の奇行に驚いたアナスタシアが大丈夫？とさらに距離を詰めてくる。

グツ、やめろつ、いつたいどうしたんだ。様子がおかしいぞ。それに頭も上手く回らない。まるで魅了にでもかけられたような……：：：魅了？：

その時、俺の脳内は霧が晴れたかのよう澄みきった。瞬時に一つの魔術を使ふ。この学園内で魔術を使えば悪魔達に気づかれるが仕方ない。こんなクソ趣味の悪い事をしでかすのは、人類史の中でも有数のろくでなしと決まっている。

俺が行使した魔術によつてガラスが割れるような音が教室に木靈する。これにより、俺は確信した。

「やつぱりな。発動したつてことは、何らかの魔術が掛けられてたつてことか。さらに言えば魅了、あるいはそれに関連する何か。ご丁寧に人避けの結界まで貼つてあるとはな。人の思いを弄んで満足か？ええ？おい——マーリン」

風が俺達を包み込む。さつきまで教室に居た筈の俺達は、一瞬で屋上に連れてこられた。

花の甘い香りが脳を刺激する。春の暖かな陽気に包まれると、あらゆる負の感情など忘れてしまいそうに――

「なる訳ねえだろドカスが。死んで詫びろや」

両手に現れた大物のナイフで斬りかかるが、マーリンは軽く杖で防いだ。

「もー、乱暴だなー。ちょっとしたイタズラじゃないか。それにどう？放課後の教室に幼馴染みと二人きり。二人はお互いの成長した姿に男と女を意識して――つて、冗談が通じる状態じゃないよね」

マーリンは下半身を凍らせられ、その氷は徐々に上半身までも侵食していく。

「朱鳥っ!!」

「おう!!」

アナスタシアのフォローによつて身動きが取れなくなつたマーリンの首を、俺は一気に刈り取つた。

マーリンの首が弧を描き花々の上へ落ちた。

――マーリン。かのアーサー王伝説に登場する魔法使いで、夢魔と人間のハーフであり、半人間の非人間。魔術の腕前はトップクラスなのに、それらを台無しにしてマイナスに行つても足りないくらいぶつちぎりの、人でなしでろくでなし。好き勝手に女達に手を出した挙げ句、最後は楽園の塔に幽閉された。それは今もなお続いている。なら目の前に居るコイツはなんなのか。勿論マーリン本人には違いない。だがマーリン本体ではない。奴が作り出した分身だろう。だから――

「あいたたた……やれやれ。ホンの冗談だつたのに、酷いなあ」

「うるせえ。お好みなら何度でもバラしてやるよ」

本気の殺意をぶち当てもマーリンは堪えたようには見えない。そればかりかさらりと殺氣を受け流しへらへら笑う。

「…………永久凍土に封じ込めれば、思考も出来ず永遠に封じ込められるのかしら……」

アナスタシアがぶつぶつとマーリンに向かって呪詛を呴いている。

やだ……闇堕オルタ化ち待つたなし?……ちよつと見てみたい気も

「朱鳥?」

「…………なんでもない。それでマーリン、何のようだ?」

マーリンは正座の状態で、さつきと同じように下半身を凍らせていた。そんな事をしてもコイツにとつてはノーダメージなんだろう。それが更にイラツとする。

「今僕の事をマーリンと書いてド屑野郎と呼びなかつたかい?」

「氣のせいだ。良いから早く言えよ。それとも何か?ひたすらバッドエンド固定のゲームをクリアさせるのが良いか?」

「ごめん。それだけはやめて」

今までのチャラついた雰囲気を消してマジになるほど脅しが効いたようだ。

マーリンは正座から立ち上がった。

「ノイマンから新しい依頼だ。この町に墮天使と廻り者が入り込んだらしい。『廻り者を捕縛、或いは排除せよ』だつてさ。廻り者の名前はフリード・セルゼン。前世は不明だが、覚醒には至つていないうだ。彼は教会を追放されてる、謂わばはぐれ神父でね。悪魔を殺すためなら同胞すら手にかけるほどの狂人らしい。くれぐれも気を付けてくれ」

はつ、なんだそりや。態々マーリンを寄越してくるからどんな大事かと思つたら、その程度の事かよ。

墮天使がこの町に入つてることは小太郎から聞いてたし、奴らが集めたであろうはぐれ神父供もいるのは知つてた。その内の一人が廻り者か……退屈しのぎにはなりそうだ。

「これでノイマンからの依頼は以上となる。捕縛か排除かは現場の君たちに任せるそうだよ。排除した場合、『枝』の回収は忘れずにつてさ」

「分かつてるつて。つーかお前、この程度で働くされたのか?」

「いやー、私も暇だつたからね。それに確かめておきたいこともあつたし……」

マーリンは目を細めてどこかを見ている。恐らくはここではない別の場所。彼が確かめたかつたこととは……？

「ま、それも済んだし、大人しく帰るとしよう。じゃあね、一人とも。またホームに帰つておいで」

マーリンは現れた時と変わらぬ笑みを浮かべて、無数の花弁に囲まれて消えた。まるで最初から存在していなかつたように……。

「チツ、言うだけ言つて帰りやがつて。あーむしやくしやする。帰ろうぜ、アナスタシア…………アナスタシア？」

アナスタシアは頬をほんのり赤らめ虚空を見つめていた。

「おーい。どうしたんだよ。マーリンの魔術が解けてないのか？」

彼女に近づいて両手で肩を軽く揺さぶる。すると彼女はハツとして、俺の目をジツと見つめる。

「…………朱鳥？」

「おーそうだぜー。朱鳥さんだぜ。大丈夫か？マーリンの悪趣味なイタズラは今に始まつた事じやねえが、今回のは更に質の悪いもんだつた。今度しつかり報いを受けさせてやろう」

俺がそう言つて笑いかけると、アナスタシアはさつきとは比べ物にならないくらいに顔を真つ赤にして勢いよく離れた。

「あっ、え、えつと…………その…………わ、私！先に帰るわね！それじゃ！」

アナスタシアはあたふたしつつその場から足早に去つていった。残された俺はそんな彼女の後ろ姿を呆然と見てることしか出来なかつた。

うわー、なんだよ…………めちゃくちゃ気まずいじやん…………。マーリンの野郎…………今度あつたらバラす。十七分割にバラしてやる。

奴が俺達に掛けた魔術は恐らく精神干渉系の魔術。対象の秘めた感情を増幅させるとかそういうやつ…………止めよう。これ以上はいけない。やつのやつたことは最低最悪なのは間違いない。今度あつたらバラす。殺す。バラして晒して並べてやる。それで良い……。

「はあ……はあ……はあ！」

私は勢いよく階段を下りていく。すれ違う生徒から驚かれるが気にする余裕がない。心の中に渦巻く様々な感情でおかしくなりそうだ。焦り、羞恥、怒り……。今日はいつもと変わらない日のはずだった。授業を受けて、朱鳥達と昼食を食べて、昼から眠気と戦い授業を乗り越える……そして皆で家に帰る。そうなるはずだった。あの最低最悪の人でなしの魔術師が現れるまでは。

気づけなかつた。気づいた時には、もう遅かつた。止められなかつた。感情が溢れだして、どうにかなつてしまいそうだつた。あともう少しで、キスをしていた。それ 자체は良いのだけど…………こんな形じや無い。マーリンのお膳立てでするなんて御免だわ。ちゃんと自分の意思で、自分の口で伝えるはずだったのに――

「きゃつ!?

「あっ！」

考えに夢中で、廊下の曲がり角で人とぶつかってしまった。勢いよく尻餅をついてしまう。

…………情けない…………ぶつかった人に申し訳ない…………

私はすぐに立ち上がりつてぶつかった人に謝つた。

「ごめんなさい！怪我はないかしら……？」

「ええ、大丈夫ですわ。でも気を付けてね？他の生徒なら怪我をしていたかもしれないから」

自分がぶつかった相手を改めて知つた。この人は……

「姫島…………朱乃…………さん」

「あらあら、私を知ってるの？とは言つても、私もあなたの事は知つて

るんですけどね。アナスタシアさん」

姫島朱乃。この学園の二大お姉様の一人で、同じ二大お姉様のリア

ス・グレモリーの女王。そして…………朱鳥が苦手としている人物。理由は知らないけど、朱鳥は彼女と会うのを避けてる。けど彼女はどうやら朱鳥を気に入っているようだ。

「でもどうしたのかしら？急いでいたようだつたけど…………」

「あっ、いえ、急いでいたわけでは…………」

…………ああ、もう…………どうしようかしら。悪魔にはなるべく接触しないように決めてたのに……。ここで不自然に立ち去つてしまえば怪しまれる。

「そうですわ。折角ですし、少しお話ししませんこと？私、あなたと話してみたいと思つていたの」

「…………えつ？」

ニコニコと笑つてゐる彼女の口から出たのは、予想外の台詞だつた。